り、その疏に「如此云送猶畢者此時寒実未畢而言畢者、但意欲全畢耳」とあるによつても、送字は最後なることを意思しつゝする行為を表わす語であることは明らかで、棄字と略同様の意義にとり得る。

(3)車字については、古くは輿、輦も亦車であつて、車、輿、輦三者の区別が明らかになつたのは隋代のようで、通典に引く続漢書百官志に見える車府令や、書紀に見える車持部、車持公の如きは、矢張り乗輿諸車を総称するに車字を以てした、吉い称呼にもとずくもので、原穀説話に見えるのも、漢土渡来の古い慣に従つて車と作つたものであろう……。

と述べられ、契沖の孝子伝原穀説話が、この長歌の末尾の典拠として、略妥当なものであると云われる。送車字等と内容の面から見て、この末尾が代匠記のいう孝子伝をもとに成立したことは疑いないと思う。

むすび

以上、竹取翁歌について詞句、内客や発想の上から漢籍との関係を検討してきたのであるが、これにより、この作品には遊仙窟をはじめとする漢籍、漢文学の影響が少なからず見られることが理解された。そしてそれは単に詞句のみならず内客や発想の面に於ても興味ある事柄があり、時に或は釈訓の問題にも関係して来るように思われる。その外なお作者や筆者或は構成等についても研究すべきであるが、それは又後日にまつこととする。

書評

杉浦明平著

『戦国乱世の文学』

村中末吉

応仁の大乱から徳川初期にかけての戦国乱世の時代は、日本文学史の中では実りの少い暗黒時代とされている。すなわち、この時代には文学書として見るべきものが少いと一般には見られている。しかし、著者は既成の文学観をすてて、当時の作品を新しい観点から見直して、新しい階級である名主下人層や町衆の生活や思想や感情や希望に新しい人間形象、新しい文体や用語、新しい情緒がどのようにうつされているかという点を基準にしている。そして粗野とか未熟とかまた非文学の作品といわれる当時の作品の中に、さまざまな文学的可能性の芽生えを探り当てようと試みているのである。

そうしてこの時代の作品の中において可能性の要素を見

まわしているのであるが、「その可能性の大部分は残念なことに江戸文学において現実化しないで終つた。ということは、その後の日本文学の流れがいくつかのたいせつな国民文学的要素を欠いたままであつたこと、その弱さは現代文学にまで引きつがれているということにほかなるまい。」と著者はいつている。この「国民文学的要素」ということが著者の文学観の根底となつているようである。そして当時の作品の中から二十の作品と中世歌謡と狂言の類をあげて、それらを分析して論を進めている。

その論拠の中で著者の文学に対する概念が先ず問題となつてくるが、この問題は各章の考察のさいにとりあげていくことにしたい。

I　戦乱時代の回想録

この章では、「慶長見聞集」「三河物語」「おあむ物語」「おきく物語」の四作品をとりあげている。

「慶長見聞集」は徳川幕政初年の雑事を写しだした、いわゆる隨筆であつて、江戸に草ぶきの家が並んで火事が絶えず、法令で板ぶきにすべきことを命じたとか、江戸の道は泥んこで、かわいて風が吹くと火事の煙とまちがえたとか、いろいろと当時の風俗人情などを知ることができる。しかし、過ぎ去つた戦乱時代の体験については「北条五代記」の方へゆずつて、ほとんどふれていない。著者は自分の協覧を披瀝するために、和歌連俳を列挙し、和漢の故事を述べ、また儒教仏教の教訓を引用まじりで述べている。風俗や巷談がそのまま書かれておれば「一つの新しい文学の芽となりえたかもしれない」と批評している。しかしこの書の価値は、江戸時代の隨筆の先例をなし、手本となつた点にあるとして認めている。すなわちこの書が、隨筆の芽えとなつた点を指摘しているのである。

「三河物語」は大久保彦左衛門筆記であつて、徳川家三将軍に仕えた大久保彦左衛門が、徳川家と大久保家の経歴を記して、度々の忠節や辛労を語つているものである。そしてこの書が古武士でなければ筆録しえないいくつかの挿話が語られているところに、この書の意義を著者は認めている。そしてこれは、「記録文学というよりも心境小説というにふさわしいほどである」と著者はいつている。

「おあむ物語」は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役に、石田三成の持ち城大垣城内にいた一女性が新しく体験したことを記したものとなつている。これは老婆の思い出話であるから、迫真性を欠いではいるが、昔の衣食の話など、十分な具象性をもつて語られている点に価値を著者は認めている。そして、これは口述の物語で、いわば一種のお伽話であり、後の小説の母ともなるものであろう。この口承文学ということに注目している。

「おきく物語」は元和元年（一六一五）大阪城落城のさ

い、城中にあつた菊という二十才の女の体験を後年聞いて書いたものである。それには落城のさいの戦闘のことはほとんど語られていないで、大阪城内の有様が挿話的に語られている。したがつて、その真実性という近代小説にとつてかくことのできないものをもつているとして、この点を指摘している。

以上の四書についての著者の見解をみてもわかるように、「真実性」、「具象性」など近代小説の要素を認めて、文学的可能性の芽生えを探求して、この後の発展に注目しようとしているのである。

Ⅱ　軍学書の記録性

この章では「甲陽軍鑑」と「雑兵物語」とをあげている。

「甲陽軍鑑」は甲州流の軍学者小幡勘兵衛の編となつているが、武田信玄の一代記や、武田家の将兵の逸話や実行を記録し、かつ戦陣の組み方や出陣の儀式まで述べてある。全二十巻という大きなものであるが、その記録の中から軍鑑の文学的価値を見出している。

「雑兵物語」は「雑兵三十名の功名談、失敗談、見聞談等の形式を借りて、雑兵の陣中及び日常における心得の一般、武具の取扱いそのほか戦場におけるいろいろのことを平易に述べたもので、戦場に未経験な雑兵に不屈の精神を注入しよう」としたものである。そしてその中に語られる教訓、体験談の真実性がこの雑兵物語で価値であると著者はいつている。

以上の二軍学書の中に、偶然まぎれこんだ事実の記録の貴重さによつて、文学的価値を認めたいと主張している。

Ⅲ　一匹狼と家畜の生きかた

この章では、宮本武蔵の「五輪書」と「武道初心集」、「葉隠」の三つの武道書をとりあげている。

「五輪書」は武蔵が晩年の寛永二十年（一六四三）に真剣勝負で鍛錬された剣術の極意を書きとめたものである。熊本の郊外岩戸山の洞窟にこもつて著わしたもので、地水大風空の五巻にわかれている。

『五輪書』においてわが宮本武蔵の思想がいかに自由でのびのびした合理主義的思考に支えられ、そして強靱で、しばしば雄勁とまでいえるにもかかわらず、屈伸性にとみ明快透明で速度のある文体として表現されているか、をながめたいだけである。

と著者はいつていて、ここに『五輪書』が文学として取り上げられねばならぬ理由があるとしている。

「武道初心集」は大道寺友山の著で、武士の奉公の心がけを説いたものである。その文体は一見整然として力強くいわれているように見えるが、分析してみると、よそゆき

の形式ばつた文体にすぎず、読者の魂に呼びかける強い説得力など少しもないと著者は批評している。

「葉隠」は一名「葉隠論語」といわれ、佐賀藩士山本常朝の口述を田代陣基が筆録したものである。藩主に仕えようとする偏狭なまでに一徹な忠誠心を書きしるしたものであるが、それに対して著者は「番犬の一途さがかえつて小気味よさを感じさせる」といつている。

以上三つの軍学書を通して、著者はその内容である精神をも考察しているが、とくにその表現の中において文学的可能性を見出しているのである。

Ⅳ　宣伝煽動文の模範

この章では蓮如上人の「御文章」をとりあげで、これは宣伝煽動の模範文として、その文の特質を論じている。その論法は全く痛快である。信者から見れば尊い文も文学という立場からみると煽動文、宣伝文、政治家の文体であるというのである。

Ⅴ　詩型変革の可能性とその頽廃

この章では中世歌謡の「宴曲」「閑吟集」「隆達小歌集」「狂言小歌集」「松の葉」「田植草紙」をとりあげで論じている。

それらの中で、「閑吟集」に見られる抒情性や官能的な愛欲表現によつて、中世の民衆の解放のよろこびの表現を知ることができるとして、そこに文学的価値を見出している。またその官能に生きる生活の背後には、死と不安に満ちた戦乱の世界のひろがりをも見出すことができる。また一面、虚無感によつて、一層肉体的享楽に陶酔しようとする欲求が一段と強められようとする歌も見出しうるとしている。

「閑吟集」の可能性は、可能性のままで埋れざるをえなかつた。ただ、そのもつているエロテイシズムとリリシズムとは、芭蕉の俳諧における恋の句に伝わつている。と著者は見ている。

Ⅵ　下剋上的社会のかたみ

この章では狂言の文章をとりあげて論じている。狂言の文章を論じる前に「謡曲は文学にあらず」という一段を書いている。

もともと謡曲というものは、猿楽能という歌舞劇の台本ならまだしも、声楽部分の詞章であつて、舞踊や音楽やしぐさと一体となることによつてはじめて一つのまつたき芸術的イメージをつくりだしうるにすぎない。謡曲の詞章それじしんは、宴曲そつくりの死んだ文体から成立つているばかりでなく、その文章は、非文法的非論理的で、語句の出典や故事来歴についてのおびただしい注釈なしには理解できない。そのように文学以外の諸要素の

援助なくしては完結しえない文章は、文学とはいえないはずだ。ところがその非文学が何か高級な文学みたいに丁重に説かれているのは、ちょっとふしぎな光景だ。この論断にはいろいろと反論もあることであろう。しかし痛快な論証である。この謡曲に反して、狂言の文学的価値を高く評価している。

Ⅶ　没落貴族の見果てぬ夢
「秋月物語」「白ぎくさらし」「熊野の本地」
Ⅷ　中世の鈍い照りかえし
「三人法師」「あきみち」「一寸法師」「物くさ太郎」「文正さうし」
Ⅸ　町衆の未熟と御伽草子の運命
「ささやき竹」「乳母の草子」

○　お伽話と記録の世界

制限枚数をこえてしまったので、Ⅶ以下は見出しだけにとどめたが、御伽草子などの特質論を通じて、江戸時代において西鶴、近松などの作品において開花するにいたるまでの文学的可能性の芽生えを、そこに認めようとしているのである。

要するに、著者は、室町末期から江戸初期に至る間に生まれた文学で、今まであまりとりあげられなかった作品に注目し、戦国乱世の中においても、文学を自由に扱うだけの文化的蓄積をもつていなかつた名主や下人、あるいは商人の間において、文学がつくられていたことを指摘し、そこに文学性の芽生えを見出そうとしているのである。

終りに、著者の文学に対する概念が問題となるが、余白がないので、残された問題として、本文を読んで各自において考察せられるよう希望しておく。

（昭和四十年七月二日）

（岩波新書　二三二頁　一五〇円）

ある女の生涯

――島崎藤村――

五郎丸　静子

この作品を続み終る時、藤村の他の作品にみられない深い感動をひしひしと感じさせられる。短編でもあるが、読者をして一気に読まずにはおかない何ものかをもつている。それほど女としてのあわれさ、宿命の悲しさを切々として訴えるものはない。

この主人公小山げんは、亡くなつた長姉で、木曽の薬種問屋に嫁した高瀬園子の暗鬱な不幸な後半世を書きつづつたものである。この姉は「家」では橋本種として旧家の切